

原著

幼年文学における食べ物の描かれ方をめぐって

— 「たべもののおはなしシリーズ」を中心に —

佐々木 由美子¹⁾

The Significance and Representation of Foods in Literature for Young Children

Yumiko Sasaki

要 約

現代の幼年文学は、その出発当初から「食べ物」や「食べること」を積極的に描いてきた。〈食〉は、その時代の空気や価値観を色濃く反映し、愛情や人間関係、しつけや教育、文化など、さまざまな問題を内包し、幼年文学の本質的な部分とも深く関わっている。2016年から17年にかけて刊行された「たべもののおはなし」シリーズにおいては、従来の作品とは食べ物の描かれ方が変化してきている。擬人化された食べ物が多く登場し、食べ物だけの世界も展開している。こうした食べ物の描かれ方の変化は、いったい何を意味しているのだろうか。このシリーズにおける食べ物の描かれ方や人と食べ物との関係、作品世界における食べ物の役割等について検討した。

キーワード：幼年文学、食べ物、擬人化

1. 問題の所在

食べ物を描いた子どもの本はヒットすると、かつていわれていた時期がある。『ぐりとぐら』の黄色いふんわりとしたカステラや、『はらぺこあおむし』のキャンディーやソーセージ、さくらんぼパイが並ぶ画面を嬉々として見つめる子どもたちをみるにつけ、現代の子どもたちにとっても、やはり食べ物が登場する作品は、その魅力を失っていないように思われる。

児童文学のなかでも、特に幼児から小学校低学年くらいまでの子どもを対象とした幼年文学において、「食べ物」や「食べること」が登場する作品は数多い。

しかも、「食べ物」が中心テーマとなっている作品も多々見受けられる。なぜ、食べ物が幼い子の文学に頻出するのか。それは、単に子どもが喜ぶからとか、食欲は本能的なものだから、といった表層的な理由だけではないだろう。そこには〈食〉をめぐる文化的・社会的背景や、〈食〉を通してしか伝えられないものが存在している。実際、大正期から昭和初期の幼年文学作品を調べてみると、食べ物が登場する作品はそれほど多くはない。しかも、食べ物が登場しても食べる行為が見られない作品がほとんどである。ここでは食べることよりも精神性が重視され、食べ物のことばかりを考えることは卑しいことだという価値観が垣間見られる¹⁾。

1) 佐々木由美子 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University) sasaki-yumiko@tokyomirai.ac.jp

一方、1950年代末から60年代にかけて成立した現代の幼年文学は、その出発当初から「食べ物」や「食べること」を積極的に描いてきた。卵焼きが大好きな王さまが登場する、寺村輝夫の『ぼくは王さま』(1961)をはじめ、中川李枝子の『いやいやえん』(1962)や小沢正の『目をさませトラゴロウ』(1965)、神沢利子の『はらぺこおなべ』(1970)などには「食う・食われる」関係や、がつがつとした旺盛な食欲が描かれていた。60年代から70年代にかけて、がつがつと食べる作品群が登場したことは、高度経済成長期の食欲なまでの時代の風潮と無縁ではなかっただろう。また、食べ物に対する意識の変化は、子どもをどのような存在としてとらえるかという子ども観・幼児観とも関係していた。幼い子の旺盛な食欲を「卑しいこと」ではなく、「子どもらしさ」ととらえる視点がなければ、「食べ物」や「食べること」を描いた作品は登場しなかっただろう。60年代の作品は、戦前の「純真無垢なよい子」から、自分の欲望のままに突き進む「エネルギーに満ちた幼児像」への転換だったともいえる。すなわち〈食〉は、その時代の空気や価値観を色濃く反映し、愛情や人間関係、しつけや教育、文化など、さまざまな問題を内包し、幼年文学の本質的な部分とも深く関わっているといえる。

筆者は、これまで幼年文学のなかの〈食〉が果たす役割や、その変遷について考察してきたが、本論では2016年から17年にかけて出版された「たべもののおはなしシリーズ」(講談社)を取り上げたい。食べ物を中心テーマとして構成したこうしたシリーズ作品は1980年代以降、目立って出版されるようになった。寺村輝夫の『こまったさんのスパゲティ』から始まる「おはなしりょうりきょうしつシリーズ」(1982～1990)を先駆として、同じく寺村の「わかったさんのおかしシリーズ」(1987～1991)、角野栄子「小さなおぼけシリーズ」(1979～1996)²、山脇恭「大どろぼうシリーズ」(1984～1993)、あんびるやすこ「ルルとララのおかしやさんシリーズ」(2005～)など、カレーライスやハンバーグ、オムレツ、エビフライ、

スパゲッティ、ラーメン、ケーキやお菓子など、子どもたちの好きな食べものが1作ごとに中心テーマとして取り上げられてきた。これらの作品は文学的な評価はけっして高くはなかったが、「夢中になって読んだ」「出てくる料理がおいしそうで繰り返し読んだ」と、多くの子どもたちの心をとらえ、大人になっても「なつかしい」と思い出される作品となったことは事実である。いずれのシリーズにも、物語の基底には料理する喜び、食べる喜びや楽しみがあった。

しかし、2016年に出版された「おはなしを楽しみながらたべもののがもっと好きになる!」と銘打った「たべもののおはなしシリーズ」においては、取り上げられている食べ物はオムライスやカレー、エビフライ、ラーメンと大きな変化はみられないものの、食べ物の描かれ方自体が変化してきていると考えられる。このシリーズは従来のシリーズ作品とは異なり、1人の作家がシリーズ全作を書くのではなく、10人の作家が1作ずつ書いている。しかし、だからこそ幼年文学における食べ物の様相が凝縮されているのではないかと考えた。

本論では「たべもののおはなしシリーズ」における食べ物の描かれ方や人と食べ物との関係、作品世界における食べ物の役割等について検討し、80年代を中心としたシリーズ作品と比べ何がどのように変化してきているのかを明らかにしたい。

「たべもののおはなし」シリーズは、以下の10作品からなる。この10作を分析対象とする。

①『オムライスのたまご』

(森絵都・作 陣崎草子・絵) 2016.10

②『うめちゃんとたらこちゃん』

(もとしたいづみ・作 田中六大・絵) 2016.10

③『スパゲッティ大きくせん』

(佐藤まどか・作 林ユミ・絵) 2016.11

④『カレー男がやってきた!』

(赤羽じゅんこ・作 岡本順・絵) 2016.11

⑤『マルゲリータのまるちゃん』

(井上林子・作 かわかみたかこ・絵) 2016.12

⑥『にっこりおすしとわさびくん』

(佐川芳枝・作 こばようこ・絵) 2016.12

⑦『にげたエビフライ』

(村上しいこ・作 さとうめぐみ・絵) 2017.1

⑧『きょうはやきにく』

(いとうみく・作 小泉るみ子・絵) 2017.1

⑨『天の川のラーメン屋』

(富安陽子・作 石川えりこ・絵) 2017.2

⑩『ねこの町のリアのパン』

(小手鞠るい・作 くまあやこ・絵) 2017.2

2. 多様化する食べ物の描かれ方

「たべもののおはなしシリーズ」10冊を通して気づくのは、1980年代を中心としたシリーズ作品と比べて、食べ物の描かれ方が多様化しているということである。これまでの作品においては、食べ物はあくまで食べ物であり、作って食べる過程のなかで物語が成立していた。たとえば、『こまったさんのスパゲッティ』では、こまったさんが自宅のキッチンでスパゲッティをつくっている最中にアフリカに迷い込み、ゾウやライオンたちにスパゲッティをつくる羽目に陥る。いずれのシリーズも主人公が食べ物を料理する中で、あるいは食べ物に関わる中で、不思議な出来事や事件が起こったり、冒険に出掛けたり、非現実の登場人物が現れたりするといった波乱があり、最終的にはおいしいお料理が出来上がり、みんなが満足して結末を迎える。食べ物は物語を動かす力として作用していた。

しかし、「たべもののおはなしシリーズ」においては、従来の作品同様に食べ物が食べ物として登場する作品と、食べ物が擬人化され、主要人物として物語を展開していく作品に分類することができる。食べ物が食べ物そのものとして登場する作品は5作品、擬人化された作品は5作品である。では、詳細についてみていきたい。

(1) 食べ物としての食べ物

食べ物が食べ物そのものとして登場する作品は③『スパゲッティ大さくせん』、④『カレー男がやって

きた!』、⑧『きょうはやきにく』、⑨『天の川のラーメン屋』、⑩『ねこの町のリアのパン』である。この5作品においては、スパゲッティや、カレー、焼き肉といった食べ物が、作って食べるという過程のなかで描かれている。したがって、食べ物は物語中で非常に重要なモチーフではあるが、主人公は人間の男の子(③④⑧⑨)あるいは擬人化された猫や犬(⑩)であり、家族や家庭も描かれる(③④⑧⑨⑩)。

また、従来の作品のように、不思議な存在が登場する傾向もみられる。たとえば、キッズシェフコンテストに出場するためパスタ料理を練習中のあつくんの前に現れたのは、親指ほどの大きさのスパゲッティの精、ペネの精、フジッリの精だ。このパスタの精たちが、あつくんに、おいしいスパゲッティの作り方を教えてくれる(③)。1年1組の話題を独占しているのは、おいしいカレーを探して各家庭のカレーを食べにやってくるというカレー男だ。カレー男に「うまーい」といわせたい一心で風太はカレー作りに挑戦する(④)。また、シンくんがお使いで買ってきた焼き豚を無理矢理エンドウ豆と交換していったのは、天の川のほとりでラーメン屋をひらいているおじいさんである。豆の木がみるみる大きくなって、シンくんを天の川まで運び、おじいさんの作ったラーメンを堪能して帰ってくる(⑨)。食べ物に関わる不思議な人物や非現実的な出来事によって、物語の空間が広がり、起伏に富んだ物語が紡がれていく。

(2) 擬人化された食べ物

一方、食べ物が食べ物そのものとしてではなく、擬人化されて描かれているのが①『オムライスのたまご』、②『うめちゃんとたらこちゃん』、⑤『マルゲリータのまるちゃん』、⑥『にっこりおすしとわさびくん』、⑦『にげたエビフライ』の5作である。擬人化された食べ物たちは、主人公あるいは主人公と同等の中心的な存在として活躍する。

食べ物の擬人化は、2000年代に入って、特に絵本でよく見られるようになっていく。村上康成「い

ただきまーす!シリーズ」(2002)や、とよたかずひこの『おにぎりくんがね・・・』(2008)をはじめとする「おいしいともだちシリーズ」、『うどんのうーやん』(2012)などの岡田よしたかの作品等である。

目や口のついたかわいらしい表情のおにぎりの絵本をみながら、食べ物を擬人化することに対する抵抗感や疑問が生じたのも事実である。なぜなら、『古事記』に語られる五穀起源説が大気都比売神の死に由来するように、「食べ物」あるいは「食べる」という行為は死と表裏一体だからである。

村瀬学(2010)は次のように述べている。「『食べる』という過程は、「姿をしている生き物」を小さく切り刻んで、「口」に入る大きさにして呑み込み、さらにそれを「消化」「吸収」して栄養分にする過程であった。この全体を「姿あるもの」が「無姿なもの」になる過程として考えてきた。「姿ないもの」というのは「死んで姿を失ったもの」という意味でもある³。つまり、調理をへて「無姿なもの」になるからこそ、生き物の命を奪う罪悪感や「かわいそう」といった感情を抜きに、私たちは日常的に食べ物を口にすることができるのだ。食べ物を擬人化することは「無姿なもの」に再び命を与え「姿をしている生き物」に変える行為である。擬人化された食べ物が登場するとき、そこにはカニバリズム的な要素や食べられることの悲惨さ、さらには性的な要素が付帯されることになるのではないか。今では、子どもの好きなキャラクターの1位を誇るアンパンマンだが、絵本として最初に登場した1976年、お腹をすかせて困っている人に、自分の顔(あんパン)を食べるようにと差し出す場面に「残酷だ」と批判が集中したことから理解されよう。

では、「たべもののおはなしシリーズ」では擬人化された食べ物がどのように描かれているだろうか。この5作の擬人化された食べ物はさらに二つに分けることができる。一つは食べられる存在としての食べ物、そしてもう一つは、自らが食べる存在としての食べ物である。

食べられる存在として食べ物が描かれる作品に

は、当然、食べる側の人間が登場する。また、食べ物と人との会話も成立している。作品は①『オムライスのみたまご』、⑥『にっこりおすしとわさびくん』、⑦『にげたエビフライ』である。

一方、食べ物が自ら食べる存在として描かれた作品は、②『うめちゃんとたらこちゃん』と⑤『マルゲリータのまるちゃん』である。この2作には、人はまったく登場せず、食べ物あるいは食べ物と動物だけの閉じられた世界が展開している。

1) 食べられる存在としての食べ物

1) -1 夢や希望をもつ食べ物たち

食べられる存在として描かれた食べ物に特徴的なのは、調理される上で理想といえる夢や希望があり、食べられることを喜びや誇りとしていることである。

『オムライスのみたまご』には、タマコ、タマミ、タマエ、タマキの卵四姉妹が登場する。卵料理には、たまごやき、茶碗蒸し、炒り卵と数々あるが、卵たちにとっての一番人気の夢はオムライスになることだ。「たまごに生まれたからには、そりゃあ、オムライスよね。なんたって、オムライスは、しゅやくのごはんだもの」(p.6)と、四姉妹もオムライスになることを夢見ている。しかし、買われていった先で、それぞれだしまきたまご、おでんのみたまご、そして納豆ごはんのみたまごになってしまう。末っ子のタマキは「本気でゆめをかなえたいなら、もっと、自分がかんばらなきゃ」(p.22)と家出をし、自らオムライスの卵にしてくださいと売り込みにいくのである。その旅の途中でまぼろしのオムライスをつくるという評判のレストラン小山の話聞き、オーディションを勝ち抜き、とうとうオムライス、しかも1日限定10食の幻のオムライスになるという夢を実現させる。

『にげだしたエビフライ』では、エビフライたちの憧れは、エビフライ弁当になることである。揚げ物コーナーからいなくなったエビフライを仲間のエビフライが探しに行くと、ちゃっかりとエビフライ弁当のなかにおさまっている。「いやだ。ここからでたくない。おべんとうの、エビフライになりたかったんだもん」

と動こうとしない仲間に、「しかたないな。おいらも、おなじエビフライ。きもちはわかる。かっこいいし、たのしそうだし、なまえだって立派な「エビフライべんとう」って、りっぱなのがついている。」(pp.62-63)と理解を示す。ここでもやはり、エビフライたちは、オムライスを見つめる卵たち同様、自分の理想をもち、お総菜コーナーを逃げ出してまでも、その夢をかなえようとする存在として描かれている。

『にっこりおすしとわさびくん』では、たくさん食べてもらうことを喜び、自慢し、誇りにしている様子が描かれる。ネタケースのなかで大きな顔をしているのは、一番人気の大トロ、中トロ、赤身のマグロ三兄弟、小さくなってすみにいるのは人気のないタコだ。

お客さんが、みんなマグロをたのんだので大将はおおいそがし。(中略)マグロ三兄弟の体は、どんどん小さくなってゆきました。小さくなった体とは反対に、態度はますます大きくなり、「どうだ、おれたちの実力は。」「今日もぼくたちがトップだね。」と、三人でほめあっています。(pp.50-51)

一番人気のマグロ三兄弟が、選ばれること、食べられることをどれだけ喜び、自慢にしているかが伝わってくる。

ここでは、食べ物たちが、こんな形で食べられる、あるいは一番人気でたくさん食べられたいという夢や希望をもっているために、食べられる悲惨さはまったくなく、それどころか、ポジティブでユーモラスな作品になっているのがわかる。

1) -2 食べ物へ共感・親近感

さらに、これらの作品において擬人化された食べ物たちは、人と会話し、心を通わせあう、親しい存在として描かれている。オムライスになりたいというタマキに、レストラン小山のことを教え「たまごにとって、さいこうのえいこうじゃないかしら」(『オムライ

スのたまご』 p.37) と背中を押したおくさんや、エビフライ弁当になりたいというエビフライたちの気持ちを理解し「しかたねえ。すきにしろ」とがっかりしながらも送り出した揚げ物コーナーのおやじ(『にげたエビフライ』 p.66)など、人間たちも食べ物たちの懸命さやけなげさに共感し、応援している。また、お寿司を食べに来た桃花ちゃんは、ネタケースのすみっこで小さくなっているタコに、体が小さいためにいつも学校でからかわれている自分の姿を重ねる。

ネタケースの中がすいてきたら、タコさんに気づきました。すみっこで、ひっそり小さく丸まっている姿は、(なんか、あたしみたい…) そう思った桃花ちゃんは、「タコください。」(p.52) (中略)「わあっ、タコのおすして、こんなにおいしいんだっ。」桃花ちゃんにほめられて、タコさんは、それは、うれしそうな笑顔になりました。(p.68)

桃花ちゃんや、揚げ物コーナーのおやじの心情は、読者の心情と重なっていく。けなげに夢を追いかけて、おいしく食べてほしい、たくさん食べてほしいと願う食べ物たちの物語は、食べ物に対する親近感を増し、食べ物たちが愛しく感じられるようになってくる。まさに、このシリーズの狙いの通り「おはなしを楽しみながら、たべものがもっと好きになる!」ことを実現させる効果をもっていると思われる。

2) 食べる存在としての食べ物

それでは、食べられる存在ではなく、自らが食べる存在である食べ物にはどのような特徴がみられるだろうか。

『うめちゃんとたらこちゃん』のうめちゃんとたらこちゃんは、梅のおむすびとたらこのおむすびの姉妹だが、2人が住んでいるのは、「おべんとう三ちょうめ」のバス停でおいた町である。そこはブロッコリーやたまごやき、からあげなど、食べ物たちが住む町で、人間は1人も登場しない。動物は唯一カラ

スが登場するが、住人である食べ物たちを食べることはせず、つついたり、ものをもっていったりなどいわずらをする程度だ。食べ物たちを食べる存在はなく、カラス以外は食べ物たちだけの平和な閉ざされた空間である。物語の中心は、うめちゃんとたらこちゃんのきょうだいげんかなのだが、うめちゃんとたらこちゃんは、たまごやきさんがつくったカステラが大好物だったり、おやつにホットケーキを食べたりするなど、自らは食べる存在である。食べ物たちの町のなかで食べる側と、食べられる側にわかれているのがわかる。擬人化された住人たちは食べる側の食べ物、擬人化されていないものは食べられる側の食べ物である。

同様のことが、『マルゲリータのまるちゃん』にもいえる。ピザ村に住むマルゲリータのまるちゃんはピザなのだが、まるいことと、なんでも力いっぱいすることが特徴のキャラクターとして造形されている。まるいところが唯一ピザらしい部分で、それ以外はピザであることはいっさい感じさせない。1年ピザ組の先生は、マリナーラ先生で、授業が終わった後、お昼の「ピザの時間」には、みんなでピザを作って食べるのだ。最終場面でも、ピザの子どもたちが、まるちゃんの冒険をたたえてピザパーティーをするのだが、ピザがピザを食べるといふ共食いとも思われる場面である(図①)。にぎやかな挿絵とは裏腹に、どこか気持ちの悪さを感じる場面でもある。しかし、ここでも食べられるものと食べられないものが、明確に線引きされている。

力いっぱい作りすぎたまるちゃんのピザは、教室の外へとびだしていき、とびだしたピザを探しに行ったまるちゃんは、自分の作ったピザをキツネのおばあさん、留守番中のこぶたくんが食べてしまったことを知る。おなかをすかしたネズミの家族も、まるちゃんの作ったピザを「おいしー」といって食べるが、ピザの子どもでもある、まるちゃん自身を食べようと考えたり、襲いかかったりはしない。つまり、この2作における食べ物は、食べ物としての本来の属性を喪失し、おむすびやピザという食べ物の形状のみが



図① ピザを食べるピザのまるちゃん (『マルゲリータのまるちゃん』 pp.74-75)

生かされた描かれ方をしているのがわかる。

先にあげた村瀬(2010)は擬人化された動物のことを、動物そのものでもなく、人間そのものでもない「架空生物」、あるいは人間と動物の間をつなぐ「中間生物」と称したが、これら2作の食べ物たちも、食べ物の形状はしているものの食べ物そのものではない、また人間でもない、食べ物と人間をつなぐ「中間生物」⁴である。アンパンマンに近いが、アンパンマンが食べられる食べ物としての属性を残しているのに対し、うめちゃん、たらこちゃん、まるちゃんは、決して食べられることのない、食べ物の形のみを維持したキャラクターだといえる。

3. 作品世界における食べ物の役割・意味

ここまで食べ物の描かれ方についてみてきたが、シリーズ全体を通して食べ物は作品の中で、何を伝え、どのような役割を果たしているのだろうか。

(1) 人と人をつなぐものとしての食べ物

まず、挙げられるのが、人をつなぐものとしての食べ物である。「同じ釜の飯を食う」という言葉もあるように、いっしょに同じものを食べることは、特別な信頼や愛情をもたらす。

『きょうはやきにく』は福引きの特賞であたった牛肉をめぐる家族の物語だが、散歩にでかけた父親と直人が道に迷い、食事時間をかなり過ぎてようやく

家にたどりついた場面である。(下線は筆者による)

「待ちくたびれて、おれ、もうはらべこだよ。」
にいちゃんは、ぼくの頭を本でコツンとした。「食
べてないの?」

ぼくが顔をあげると、にいちゃんがくちびるを
とがらせた。

「みんなで食わなきゃ うまくないだろ、焼き
肉って。」 (p.67)

けむりとあまくてこうばしいにおい、それから
わらい声で、ぼくんちはいっぱいになった。

(p.75)

そこには、食卓を囲む家族の幸せな様子が描かれ、
共に食べることの意味や価値が示される。また、同
じ料理でも、それぞれの家庭で独自の味が生まれ
てくる。食は家族の築いた歴史でもある。『カレー男が
やってきた!』では次のように語られる。

カレーってすごい。家ごとにくふうしたその家
のカレーがあり、みんな自分ちのカレーが大す
き。話を聞いてるうちに、その家のカレーが
食べたくなる。そして、仲よしになりたくなる。
そのせいか、このごろ、クラスが前より楽しい。
わらい声もふえている。(p.40)

これらの場面が象徴するように、家族の団らんや
共に食べる喜びなど、人と人をつなぐものとして
の食べ物の機能がみられる。これらは従来の作品の
中でも繰り返し描かれてきたものではあるが、幼い
読者にとって食とおした家族の愛情や信頼関係
は、生きていく上での基盤ともいえる重要なもので
ある。

霊長類学者の山極寿一(2003)は「親しい仲間と
いっしょに食べる快樂、未知の仲間と食卓を囲む喜
びと興奮は、人間だけが持っている貴重な進化の遺
産である」⁵と述べているが、仲間と一緒に食卓を
囲むことができるのは、霊長類では人間だけなのだ

という。共に食卓を囲むということは、個としての
食欲を抑え、食べ物を分かち合うことができなけれ
ば成り立たないからである。つまり、いっしょに食
べるという行為の中に、すでに社会性が埋め込まれ
ているのである。幼年文学の中に、みんなでいっしょ
に食べる、にぎやかで楽しい場面が数多く登場する
のも、もっともである。

(2) 癒やしとしての食べ物

次に、哀しみを癒やし、人に元気を与えるものと
しての食べ物である。

奥さんをなくし、食べることも、笑うことも、遊ぶ
ことも、すべての気力をなくしてしまった犬のジョン
ソンさんの哀しみを癒やしたのは、猫のリリアさん
が焼いた焼きたてのパンだった。

ああ、ヘレンにもたべさせてあげたい。こんな
おいしいパン、めずらしいパン、ヘレンにも食
べさせてあげたかった。ふたりでいっしょに食
べたかった。(中略)

むねをつきさすようだったかなしみが、ほんの
少しだけ、やわらかくなっていたのです。やき
たてのパンのようにこうばしく、ふんわりとした
ものに変わってきていたのです。リリアさん
には、そのことがわかっていました。やきたての
パンには、かなしみの形を変えることのできる、
ふしぎな力がある。

(『ねこの町のリリアのパン』 pp.55-58)

なぜ、リリアさんの焼くパンがそんなにもおいし
いのか。「いっしょうけんめい、心をこめて、あたり
がまだ暗いうちから、パンをつくっている」(p.63)
からである。食べ物には作り手の思いが込められて
いる。ジョンソンさんが亡くなった奥さんにも食べ
させてあげたいと思ったように、食べ物を与えること
は「愛」の行為である。また、出されたものを、なん
の疑いもなく食べる行為もまた、愛と信頼がなく
てはできないのである。

同様に、次にあげるのはお寿司を食べ終わった後の桃花ちゃんの様子である。

桃花ちゃんは、「ごちそうさまでしたっ。」
大きな声で言って、立ち上がりました。きたときはぜんぜんちがう、明るい顔です。これならいじめっ子になんか、まけないでしょう。
(『にっこりおすしとわさびくん』 p.73)

お寿司たちから元気をもらい、前向きになった桃花ちゃんの様子である。人を癒やしたり、元気を与えたりするものとしての食べ物が描かれている。

(3) 親しいものとしての食べ物

これまでみてきたように、擬人化された食べ物たちは、悩んだり、ケンカしたり、夢に向かって努力したりするけなげな存在として描かれていた。こうした食べ物の姿は、桃花ちゃんが隅に小さくになっているタコをみて、自分みたいだと思ったように、読者に親近感を抱かせる。これは擬人化の効果であろう。

次に挙げるのは『オムライスのだまご』の結末部分である。

見てください。この、タマキのうれしそうなこと！
「わたし、生まれかわっても、きっとまた、オムライスになりたい！」
みなさん。どうか、オムライスを食べるときには、それが、ゆめをかなえたたまごだってことを、思いだしてくださいね。(p.75、図②)



図② 夢をかなえた卵のタマキ (『オムライスのだまご』)

ここからも伝わってくるように、読者は前向きでひたむきでユーモラスな食べ物の物語にふれることで、「命をいただく」とか「死んでくれた」というのは、また別の形で食べ物への親しみがわき、食べる楽しさが生まれてくるのではないだろうか。

4. 「たべもののおはなしシリーズ」にみる食のありよう

以上、「たべもののおはなしシリーズ」における食べ物の描かれ方や、食べ物の意味するものについてみてきた。このシリーズで食べ物を通して描いているのは、1960年代から70年代にみられたような「食う・食われる」といった、がつがつとした世界ではない。また、80年代を中心としたシリーズ作品のように、作ることや食べることを楽しみ、食を謳歌するような世界でもない。10作品のうち、半分は家庭料理ではなく、レストランや、寿司店、総菜コーナーなどが舞台となっていたこと、また、料理する作品においては、調理するのがすべて男の子である点などからも、時代や食をとりまく変化がうかがわれる。

本シリーズで特徴的なのは、食べ物たちが「オムライスになりたい」とか「エビフライ弁当になりたい」といった夢や希望をもち、読者である子どもたちに向かって、「食べて・食べて」「おいしく食べて」「たくさん食べて」と主張してくるような世界を描いていたことである。その一方、「たべもののおはなし」

とうたいつつも、食べ物としての本来の属性を喪失したキャラクターとしての食べ物もみられた。いずれも、飽食の時代といわれ、おなかがすかない子どもや、食べることにあまり関心を示さない子どもも増えたといわれる現代を象徴しているのではないだろうか。シリーズのキャッチフレーズである、「おはなしを楽しみながらたべもののがもっと好きになる!」という文章も、見方を変えると、食べ物に関心のない子どもの存在を浮かび上がらせているように思われる。

現代の幼年文学は、「食べ物」や「食べること」を積極的に描き、1960年以前の作品とは異なる新たな幼年文学を築いてきた。その当事者であった寺村輝夫(1978)は、鳥越信や長崎源之助との対談の中で、今後の子どもの本と食べ物について次のように述べている。

戦後出てきた作家が書いてきた食べ物というものを、たとえばぼくなんかたまごやきを書いたということを含めさせていただくならば、『目をさせトラゴロウ』の中で中華まんじゅうを食ったり、『ぐりとぐら』の中でどうかしたということの驚きみたいなものが、さて、次の世代、どん底から出発していいことばかりという世代の人たちが、食べものをどう書くかということに対してはものすごく興味がある。そういう革命的な食べもの観というものが出てこなければ、児童文学はもうひとつあたらしくならないと思うな。⁶

飢餓体験から出発した世代の作家とは異なり、食べ物が豊富にあるのが当たり前で、食べ物に対する感動や食べることへの関心が薄くなった世代が、食べ物をどう描くのか。「革命的な食べもの観」が出てこなければ、児童文学は新しくならないのだと寺村

はいつているのである。

今回みてきた食べ物の描かれ方が革命的であったかどうかは、今後さらに検証していく必要があるが、食べ物を通して変わらずに伝えられているものと、変化してきているものがあることは確認できた。今回の10作に限ってではあるが、1960年代から70年代にみられた、がつつとした作品や80年代を中心とした食を謳歌するような作品は姿を消し、逆に食べ物側の視点から「食べて・食べて」と食べてもらうことに貪欲で前向きな食べ物たちの姿が描かれていた。飽食の時代だからこその作品であるともいえる。

しかし、食べ物自身が夢や希望をもっているという視点と、そこで繰り広げられるユーモラスな物語は、現代の子どもたちに食べ物に親しみを感じさせ、物語を楽しみながら食べ物が好きになるようなファクターとして作用しているのではないかと思われる。

【注・参考文献】

- ¹ くわしくは、拙著「みんなで食べるとおいしいね」『子どもの本と食』（川端有子編著、玉川大学出版、2007）を参照のこと。
- ² 食いしん坊のおばけアッチが登場する本シリーズは、2018年現在もシリーズ名を変更して継続出版されている。40年にも及ぶロングシリーズになっている。
- ³ 村瀬学（2010）『「食べる」思想—人が食うもの・神が喰うもの』洋泉社 p.49
- ⁴ 村瀬学（2010）前掲書 pp.170-171
- ⁵ 山極寿一（2003）「食卓の進化論」鷲田清一編著『〈食〉は病んでいるか』ウエッジ p.173
- ⁶ 寺村輝夫（1978）座談会「飢餓体験と児童文学」『日本児童文学』11 p.30

（ささき ゆみこ）

【受理日 2018年10月9日】